

## 特集 異文化理解の授業づくり

ユーモアで日本文化を発信し、  
モチベーションをあげる

大島希巳江

(文京学院大学)

## 1. ジョークや小噺に表現される文化

ユーモア学では、ジョークの役割の1つを次のように考えています。「ジョークは社会(特定の文化圏)で何が起きているのかを測定し、記録し、示唆する社会の温度計である(Davies, 1990)。」つまり、笑い話には、その時代に起きている事柄や人々の生活習慣、思想が現れているということです。

たとえば、世界で最も多いといわれるユダヤジョークにはこんなものがあります。「ヒトラーが有名な占い師に『私はいつ死ぬだろうか』と聞いたところ、占い師は『ユダヤ人の祝日にお亡くなりになります』と答えました。そこでヒトラーはユダヤの祝日に特別警護を増やしました。ところが占い師は『そんなことをしても無駄です。いつお亡くなりになっても、その日がユダヤ人の祝日になります。』」このジョークは、ヒトラーに迫害されたユダヤ人の悲劇的な歴史を表現しています。このようなジョークの裏には、それぞれの文化の歴史や人々の思想が見え隠れしています。世界のジョークから世界の文化や事情を学ぶという学習方法があるほどです。

日本の小噺や笑い噺も同様です。「すし屋で客が言いました。『すみません、このエビ、なんだかおいしくないんですが。2週間前に来たときはすごくおいしかったのに。』すし職人『おかしいですね。同じ日に仕入れた同じエビなんです。』すしネタは新鮮でなければならない、という食文化が表れています。日本人の食材へのこだわりがわかる噺です。

もちろん、言語も含め、その文化について熟知していなければわからない、笑えないものも多いのがジョーク・小噺です。海外のジョークが今ひとつおもしろくないと感じることがあるとしたら、それは

文化差からくるものがほとんどです。

また、単語やフレーズのダブルミーニングを使ったシャレなどは日本語にもありますが、翻訳もしづらく、それほど爆笑するようなものでもありません。英語のそれも同様で、それほど笑えないかもしれませんが、語学学習の教材としては有効です。「A man called an airline company and asked. 'Excuse me, how long does it take to fly from Tokyo to Honolulu?' The operator said, 'Oh, just a minute.' The man said, 'Wow! Really? That fast? Thank you!' He hanged up.」このジョークのjust a minute(ほんの1分/少々お待ちください)のダブルミーニングが理解できれば、これは長期的な記憶に残ります。

## 2. ユーモアの効用

異文化理解の教材として、ユーモアは非常に有効といえます。笑いは異文化に対して否定的な拒否反応を抑え、好意的に受け入れる寛容な環境を作ってくれるからです。題材がおもしろいことで、生徒は題材や英語に対して好意と興味を持ってくれるというメリットがあります。そして、そのおもしろい題材を提供してくれた教員にも好意と興味を持ちます。ユーモアはより良い人間関係を築くのに大きな役割を果たすので、生徒と教員が一緒に笑うということは、異文化の持ち主同士の絆として重要です。

また、おもしろい噺は記憶に残りやすいということもわかっています。おもしろい噺を聞くと、それを人に話したくなるので、聞く(input)、話す(output)のプロセスが自然とできるわけです。そのため、英語に限らず、おもしろい噺は長期的な記憶に残る傾向があります。笑い噺だと前置きすると、

生徒たちは一緒に笑いたい、聞き逃して自分だけが笑えなかったでしょう、という気持ちから、いつも以上の集中力を発揮して一生懸命聞いてくれます。噺の内容に伴って、覚えた英語についても長期的な記憶が期待できます。世界の文化を英語のジョークを通して覚えることにより、異文化理解と英語の両方を楽しみながら学習することが可能です。

### 3. 日本文化を発信する

受信という意味では世界のジョークは良い題材といえますが、発信となると、やはり日本人である限りは日本文化を発信できる小噺が良いと思います。英語を話す日本人に世界が期待することは、日本について英語で説明できることです。意外に知られていない日本文化を見直し、再発見し、英語で話せるようになると、真の国際人・グローバル人材に近づけます。ユーモアの発信は相手との友好関係を築くのにも有効ですから、やはり日本人も日本のユーモアを発信して異文化交流に貢献したいものです。

たとえば、古典的な小噺にこんなものがあります。  
A Japanese and a foreigner were talking.

'Hi, teach me a Japanese word!'  
'OK, how about *arigato*. It means thank you.'  
'Ari..., Aga...to..., oh, it's difficult.'  
'Well, then remember it as alligator. *Arigato*, alligator, *arigato*, alligator..., they sound close.'

Next day, the Japanese said, 'Hi, I'll buy you a cup of tea. It's on me.'

'Oh, ah..., crocodile!'  
この小噺の良いところは、これを聞いた外国人は間違いなく日本語の「ありがとう」という言葉を覚えてくれるという点です。笑いながらも、これくらいはちゃんと覚えておかないとまずいな、という気持ちになるのでしょうか。このような小噺を、最初はペアワークとして、2人一組で覚えて演じてみるとよいと思います。ナレーションを1人入れてもよいでしょう。どの役をやるか、どのようなジェスチャーや顔の表情でやるか、声の大きさやトーンはどうすればおもしろいのか、などを話し合いながら繰り返し練習し、さらに発表する場があると、楽し

みながら学習できるのではないのでしょうか。

もっと短い噺もあります。

'Hi, Toku. How is the bookshelf I built for you the other day?'

'Oh, it's broken already. It was no good.'

'What? You didn't put anything on it, did you?'  
腕の悪い大工さんの噺ですが、これなども2人一組で練習すると楽しくできます。

小噺の他にも、落語には、そばをズルズルと食べる噺、幽霊が出てきて人気者になる噺、丁稚奉公の少年が失敗ばかりする噺、髪結いの亭主を支えるしっかり者のおかみさんの噺など、日本文化をたっぷり含んだ噺がたくさんあります。外国人には異文化である日本文化も、笑い噺であれば寛容に受け入れられ、理解されやすくなるので、小噺・落語は日本を発信するためのよい題材だといえるでしょう。

### 4. 異文化理解を学習する場

異文化理解や異文化交流の大切さについて学ぶ場は、やはり英語教育の授業が最適であろうと思います。英語で発信されている世界の様々な文化や価値観に対して、偏見を持たずに学び理解するという姿勢を育むことができ、また、日本文化を英語で表現することによって、英語圏から見た、異文化としての日本文化に気づくこともできます。将来、生徒たちが、身につけた英語を使って何を語り、何をやるのかはわかりませんが、英語を使うということは、話す相手は日本人ではない可能性のほうが高いのです。英語圏の人とも限りません。どこの国の人でも、日本人である私たちはおそらく英語を使ってコミュニケーションするのです。ということは、英語で話すことは、必然的に異文化コミュニケーションをすることになります。それには、異文化理解は必要不可欠であり、スキルの1つであるとも言えます。そして、異文化間で一番大事なことは、友好関係を持つということです。これは目的がビジネスでも政治でも同じはずです。英語でコミュニケーションをする際には、ユーモアを少し意識して世界との友好関係を結べるとよいと思います。

【参考文献】  
Davies, Christie (1997). *Ethnic Humor Around the World*, Indiana University Press.